



第7号 ホロコーストを学ぶスタディーツアー

中国新聞「ユニアター」の高校生4人は、第2次世界大戦の悲劇の象徴の一つ、ホロコースト(ユダヤ人大屠殺)について学ぶ欧州スタディーツアー。主催・公益財団法人ヒロシマ平和創造基金に参加しました。被爆地広島を訪ね、ナチス・ドイツの人種差別政策で罪をなした者が犠牲になった現場を巡り、平和を築くための役割について考えを深めました。

高校3年の河野新大(さん)は、高校2年の島岡舞(さん)と、広島市内の大学生6人と一緒に、ポランドにあるアウシュビッツ強制収容所跡を見学しました。遺品の数々に人々の命を思い浮かべ、広大な敷地を歩くことで犠牲者の絶望感と戦争の残酷さを感じ、生還者の証言にも耳を傾け、記憶を受け継ぐ決意を新たにしました。オランダに移動した後は、アンネ・フランクが家族と隠れた家を訪ね、自記平和を願い続けた少女に、自らの姿を重ね合わせました。

現地での主な活動

ポーランド

オシフィエンチム市
・アウシュビッツ強制収容所(現アウシュビッツ・ヒルノウ国立博物館)見学
・博物館の副館長と面会
・館内にある一絲の展示品一を見学
・収容所生還者の証言を聞く
・現地の高校生、大学生と意見交換
・ヤシウ・フレルト市様に面会、平和賞長官の会長からメッセージを手渡す

オランダ

阿姆斯特ダム市
・アンネ・フランクの隠れ家を利用した資料館「アンネ・フランク・ハウス」を見学。ロルドレオポルト館長と面会
・資料館の職員やボランティアなど意見交換
・阿姆斯特ダム市役所を訪ね、平和賞長官の会長から市長宛てのメッセージを届ける



スタディーツアーに参加した高校生6人の感想報告は、16日朝刊に掲載する予定です。

アウシュビッツ 絶滅収容所 感情止まる

刈り取られた大量の髪の毛は、さらされた靴の山、横並びの遺骨が、数え切れないほど展示されていました。一つ一つに宿っていた人の命が奪われたと想像すると、感情が止まるほどの衝撃を受けました。こんなに多くの人が殺されたとは思っていませんでした。これがホロコーストの現実です。

「上へ」と手を求めた手を伸ばし、最後は倒れた人たちが積み重なった。ヒラミッドのような形になったそう。すぐ隣に雑草があり、1日約600人が焼死しました。火葬が急を追い付かなくなり、野焼きなどもあったそうです。遺体を運ぶ仕事もユダヤ人に課されました。死んだ仲間を葬る場所もありません。私たちが想像が及ばないほどの感情が揺るぎませんでした。



ビルケナウの監視塔の前で取材するツアー参加者



欧州全域からユダヤ人らを運んだ貨車の前で説明を聞く島岡さん(奥左)と河野さん(奥右)

「生きている者を捨てるか、死んでいくか。アウシュビッツ強制収容所から運ばれたポランド人のアウフド、ドゥゴボリスキ(89)は過酷な労働に耐え、脱出できる理由をこの旅で思い出した。歴史家として活動する、過去を冷静に見つめ直す大切を語ります。

「生きている者を捨てるか、死んでいくか。アウシュビッツ強制収容所から運ばれたポランド人のアウフド、ドゥゴボリスキ(89)は過酷な労働に耐え、脱出できる理由をこの旅で思い出した。歴史家として活動する、過去を冷静に見つめ直す大切を語ります。

生還者ドゥゴボリスキさん 過去を学ぶこと大切

「生きている者を捨てるか、死んでいくか。アウシュビッツ強制収容所から運ばれたポランド人のアウフド、ドゥゴボリスキ(89)は過酷な労働に耐え、脱出できる理由をこの旅で思い出した。歴史家として活動する、過去を冷静に見つめ直す大切を語ります。



犠牲者の写真が掲げられたのか(右) 部屋で中谷さん(右)と河野さん(左)から4人目

罪なき犠牲 忘れない



アンネ・フランクの写真(©アンネ・フランク・ハウス)



アンネの日記(©アンネ・フランク・ハウス)



アンネの隠れ家入口口かなが秘密の入り口本棚と、それを隠す本棚(©アンネ・フランク・ハウス)

アンネ隠れ家日記への思い 胸詰まる

「アンネの日記」で知られるアンネ・フランク(1929～45年)が、父や姉たちと暮らしていたオランダ・阿姆斯特ダム市の隠れ家を訪れました。

「アンネの日記」で知られるアンネ・フランク(1929～45年)が、父や姉たちと暮らしていたオランダ・阿姆斯特ダム市の隠れ家を訪れました。

「アンネの日記」で知られるアンネ・フランク(1929～45年)が、父や姉たちと暮らしていたオランダ・阿姆斯特ダム市の隠れ家を訪れました。

「アンネの日記」で知られるアンネ・フランク(1929～45年)が、父や姉たちと暮らしていたオランダ・阿姆斯特ダム市の隠れ家を訪れました。



収容所で入れ墨された番号を見せながら証言するドゥゴボリスキさん

「生きている者を捨てるか、死んでいくか。アウシュビッツ強制収容所から運ばれたポランド人のアウフド、ドゥゴボリスキ(89)は過酷な労働に耐え、脱出できる理由をこの旅で思い出した。歴史家として活動する、過去を冷静に見つめ直す大切を語ります。

事前学習を重ねてから出発しましたが、現地を訪れて初めて分かることが、たくさんありました。アウシュビッツ強制収容所の跡を見て回り、人の生きた気配が感じられないことに驚きを感じました。自分と同じ人間が、「人」として扱われず、ただ殺されたいという悲しい現実に向き合うと、やりきれなさだけが残りませんでした。この気持ちは、現地を訪れたときから変わらないうちに、とても驚きました。ポーランドの若者と意見交換もしました。平和教育が広島とかなり違うことに、とても驚きました。広島で生まれ育った私は、小学生の時に初めて原爆資料館を見学し、被爆の実態を学びました。しかしポーランドでホロコーストについて学習するのは、中学3年からだそうです。事実を受け止められ

毎月第2、第4木曜日に掲載します。今回の記事は、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイト(http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=42813)で読むことができます。

若い世代も伝えよう 島立広島高3年 河野新大